

『03・レイラ様とはじめての添い寝』から約一ヶ月後。

主人公とレイラの同居が始まつてからしばらくたつたある夜。
二十四時近く。

主人公とレイラは、この一ヶ月ですっかり仲良くなつた。

今では夜中、主人公がレイラの部屋を尋ねる事も珍しくないほどである。
今日もまた、そんな夜の一つだ。

主人公は、まだ少しレイラに遠慮しつつも、かなり心を許すようになつていた。
そしてそれはまた、レイラも同じであつた。

主人公、レイラの部屋に向かつて歩いて行く。
すると、扉が少し開いていた。

主人公の気持ちは、レイラにはすでにお見通しのようである。
主人公、それを気恥ずかしく思いつつ、レイラに会いに行く。

SE1 主人の足音

【最初から最後まで流す】

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

【穏やかに、優しく。

すっかり慣れた様子で。

主人公の存在に気づいたので、声をかける。

トラック03とは、主人公との関係が大きく変わっている】

おお。君か。

また眠れないのか？】

＜主人公＞

【……はい……。あの、今日も……いいですか？】

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

【穏やかに優しく。

『もちろんんだ』という感じで
うん。いいぞ。

【特に、とても優しく】
おいで

主人公、とことことレイラのベッドまで歩いて行く。

それを見るレイラは、なんだかちょっとにやにやと、嬉しそうにしている。
レイラは、主人公が自分に頼ってくれる事が、とにかく誇らしいのである。

S E 2 主人公の足音 2

【最初から最後まで流す】

S E 3 主人公がベッドに入る音

【最初から最後まで流す】

「優しくからかう。

【優しくからかう。
すっかり主人公と親しくなつて いる】
なんだ。今日はどうした？

【冗談っぽく。

レイラは、今、主人公が何やら落ち込んでいるらしい事を察している。
だが、あまり眞面目に『何かあつたのか』と聞くと、かえつて重々しい空氣になるような気がする。

なので、できるだけ深刻な雰囲気にならないよう、軽い感じで質問している
学校で何かやらかしたか。

それとも、これからのことについて悩んでいる?』

〈主人公〉

「……なんで、わかっちゃうんですか?』

主人公、ちよつとむくれてたずねる。

レイラは自分の事を『人の気持ちを読むのが苦手だ』と言い、とにかくそれを気にしているが……。少なくとも、主人公との関係には、それはあてはまらない。
もしかすると、主人公がよっぽどわかりやすいだけなのかもしれないが……。

【優しく笑う。余裕がある。

主人公と親しくなり『自分達は仲良くなつた』という自信がついてきたので】

はは。そりやそうさ。

【『鈍い』と『観察眼に欠ける』は、以前仲間に言われた事について言っている。
やはり、とても気にしているので】

常日頃鈍いだの、観察眼に欠けるなどと言われている私でも、君の事なら自信がある。

【少し得意げに】

何と言つたつて、もう一ヶ月も一緒に暮らしているんだからな。
私もだんだん、君という人間への理解を深めているという訳だ】

△主人公△

「……なるほど……」

そう言われると、納得できるような気もしてくる。

だがそれは、レイラがそれだけ、主人公に注目し続けてくれた証拠でもあるだろう。
つまりそれだけ、レイラは主人公との関係に心を割き続けてしているという事だ。

【少し得意げに】

【ここから、主人公の性格について述べていく】
たとえば、こんな事がわかるぞ。

端的（たんてき）に言えば、君は見た目で損をしがちなんだな」

〈主人公〉

「……ええつ？」

主人公、いきなりこのような指摘をされ、どきつとする。
思い当たる節が、ありすぎるほどにあるからだ。

「少し得意げに。

【ここから、主人公の性格について述べていく】

そう。

君はいかにも聰明だ。

問題なんてまず起こさなそうだし、周りからも『手がかからない』『この子ならきっと大丈夫だ』と放つておかれがちだ』

〈主人公〉

「……！」

主人公、思わず息をのむ。

全くその通りだ。

主人公には、昔からそのような傾向があるのだ。

主人公としてはまつたくよくわからないのだが……レイラが今言つた通り、主人公は周囲から『ちやんとしてそう』と思われる事が多いのである。

そういえば、レイラも当初は、主人公をそのように捉えていたようと思う。
だが、それが変わつたという事は……やはりレイラは、それだけ主人公を見てくれているという事になる。

「【ここで、少し真面目なトーンになる。

ここから※マークのセリフ終わりまで、段々とても優しい口調になつて行く。

『自分は、主人公が抱えている淋しさを理解しているよ』という事を伝えたい】
だが……実はそんなにしつかりしていない。

おまけに、かなりの淋しがり屋だ。

なのに、なかなかそれを理解されず、今まで色々苦労してきたんだろうと、今はわかる

よ。
だから……こんな時は、どうするんだ?」※

〈主人公〉

「……レイラさんに、頼る？」

だから主人公も、今日は素直に頼る事にした。

おずおずと、おつかなびつくり。それでもはつきりとそう口にして、レイラの事を見た。すると、レイラがとても嬉しいそうな顔をする。

「少し得意げに。

半ば『言わせた』感があるとはいっても、主人公がそう言つてくれて、とても嬉しいので

そう！ 私に頼るんだ。

【とても優しく。

主人公を安心させたいので】

さあ。話してみろ』

〈主人公〉

「実はですね……。特に何かあつた訳ではないんですけど……」

主人公、自分の指先同士をくつつけて、もじもじと、だが、少しずつ話し始める。

今主人公が抱えている悩みは実に漠然としていて、とりとめもなくて。相談するには、なんだか申し訳なくなるようなものだ。

だがその一方で、誰かに話したい悩みでもあつた。

ほんやりとしそぎていて、自分ひとりでは、とても解決できそうもなくなつていたからだ。

「【優しく、ゆっくりと相槌を打つ】

……ふむ」

〈主人公〉

「漠然と、悩んでしまつて。

こちらに来て一ヶ月。

今のわたしは、この生活にも慣れ、将来よい騎士になれるよう、自分なりに努力しているつもりです。

でも『それだけでいいのかな。本当は何か足りていない部分があるんじやないのかな』つて思う事があるんです。

その『何か足りない部分』が具体的に何なのかはわかりません。だけど『足りていない気がする』という気持ちだけが強くあるんです」

「少し真面目な感じで相槌を打つ」

ほう……」

〈主人公〉

「そう思い始めると『足りない部分』について考える時間が長くなってしまって。そうすると、いくらでも思いついてしまうんです」

「『なにつ。 そうなのか。 私はそうは思っていないが』という感じで相槌を打つ」

……むつ

〈主人公〉

「多分これは、ここに来た頃には感じなかつた悩みなんです。」

あの頃は、新しい生活に慣れるのに必死で。

そんな事を考へている余裕はありませんでしたし……『足りないのは当たり前だ』『だつて、始めたばかりなんだから』と思う事ができましたから。
……でも、今のわたしは違います。

レイラさんや騎士団の皆さん、学校の先生。

色々な方にご指導いただいて、面倒を見ていただいている立場です。だから、その恩に報いなくてはならない。

皆さんのが喜んでくれるような、立派な成果を上げなくちゃいけない。そう思っているんですが……。

その理想には程遠いような気がして。

『このままじゃいけない気がする』って。

危機感みたいなものだけが、毎日強くなるんです』

「納得した様子で相槌を打つ。

主人公の気持ちは、とても理解できるので

そういう事か……』

〈主人公〉

「はい。ほんと、漠然としてて。

聞いていただくのも申し訳ない位なんですが……』

言うと、レイラが『そんな事はない』と言うように、小さく首を振る。それから、ゆっくりと話し始める。

「少し間をあけてから。

【とても優しく】

うん。君の気持ちはよくわかった。

確かにそうだな。

今の暮らしに慣れてきたからこそ、気づいてしまう悩みというのもあるな。

【しみじみと相槌を打つ。

だが、主人公のこの悩みに対してもいい答えが見つからないので、少し悩んでしまう

【そうか……。

【そうだなあ……】

だが、やはりこれはレイラにとつても難問であつたようだ。
レイラはすっかり困つてしまつて、考え込んでいる。

だから、主人公が『やはり話すべきではなかつた。レイラさんを困らせてしまつた』と
後悔し始めていると……。

ふと、こんな言葉が発せられた。

「【考えて、ようやく思いつく。

あえてこれまでの日々を振り返る事で、主人公に、自分の成長を実感してもらおうとする

では、今日は、この一ヶ月の歩みを振り返ってみるのはどうだ

「主人公

「えつ？」

だから主人公は、レイラの言葉にきよとんと顔をあげる。
それは、いつかの提案とは正反対のものだったからだ。

「とても優しく。

ここから※マークまで、

この一ヶ月の主人公について述べていく

約一か月前、君はこの家で新しい暮らしを始めた。
慣れない事だらけだつたろう。

不満に思う事や残念な事。

思うようにいかなかつた事もあつたはずだ。

だが、最終的には、どれもきちんと乗り越えた」※

〈主人公〉

「！」

「とても優しく。

ここから※マークまで、

『自信を持つて』『今私が言つた事は、主人公本人もよくわかっているだろう?』という
感じで

そんな君なら。

仮にまだ問題が残されていたとしても。

今後、これまでにない苦しみに直面したとしても。
きっと大丈夫だと、私は確信しているよ。

なぜなら、君はとてもよい子だし、考える力がある

レイラの言葉が、主人公の心にしみわたつて行く。

なんだか、また泣いてしまいそうだ。

こんな至らない自分を、こんなにも評価してくれる人がいる。

そう思うだけで、なんだか申し訳なくもあり『買いかぶりすぎだ』と言いたくもなり…

：だけどそれ以上に『その期待に応えたい』『その言葉を現実にしたい』という気持ちが強くなっていくからだ。

「少し得意げに。

『主人公には自分が居る』という事を伝えたいので

何より私がついているからな。

この私がいる限り、君を一人で悩ませはしない。

君がいつかこの家を出していく日があつたとしても、私は必ず、君の力になり続けると約束しよう。

〔少し真面目なトーンになつて〕

だから、大丈夫だ」

〈主人公〉

「レイラさん……！」

レイラが大きく頷き、主人公は、思わず胸がじーんとなつて、レイラの名を呼ぶ。するとレイラが、あの日のように、背中を優しく叩いてくれた。

SE4 レイラが主人公の背中をぽん、ぽん、と叩く音

【最初から最後まで流す】

【二回分『ぽん、ぽん』と流し終えた後、残りを次のセリフとかぶせて流す】

「【とても優しく、ゆっくりと。

ここから※マークまで、

主人公を寝かしつけるような感じで』

よし、よし。

今日も話してくれてありがとうな。

おやすみ。君はいつも、とてもよくやつているよ。

たとえ君が、今の自分に満足していなかつたとしても。

私は君を肯定しよう。

君は立派だ。私の自慢の部下であり、仲間だ。

だから……今日も安心して眠るといい」※

だから、主人公は心からのお礼を伝えて……また、温かくなつた身体に、眠りを誘われ始めた。

△主人公

「わたしこそありがとうございます……今日も話を聞いてくれて。わたし、レイラさんが居るから、何とかやつていています。いつも、本当にありがとうございます」

「優しく笑いながら。

主人公の気持ちがとても嬉しいので】
うん」

そしてレイラは、そんな主人公の耳もとに近づいて、そつとささやく。静かな、春の夜の事だった。

△ボイス加工あり

【左耳だけに聞こえるようにする】

【特に優しく。ささやくように。

主人公の耳元で言っているイメージ】

おやすみ】

ここでフェードアウトして終了。